

# 非 在

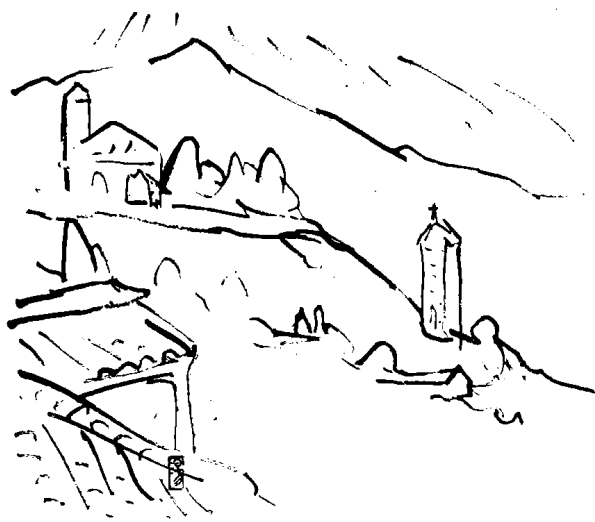
## 前登志夫歌集

---

現代歌人叢書・34



前登志夫歌集  
自選歌集 非 在  
現代歌人叢書 34



非 在 現代歌人叢書34

---

昭和51年4月1日発行

著 者 前 登 志 夫

発行人 石 黒 清 介

印 刷 協同印刷株式会社

発行所 短 歌 新 聞 社

〒166 東京都杉並区高円寺南4-43-9

振替 口座 東京 21683

電 話 03 (312) 9 1 8 5

---

定価 700円

## 目次

|           |    |
|-----------|----|
| 樹         | 五  |
| オルフォイスの地方 | 三四 |
| 交霊        | 三六 |
| 罪打ちゐたれ    | 三七 |
| 谷行        | 三八 |
| 喝食        | 三七 |
| 解説 佐藤通雅   | 二七 |
| 前登志夫略年譜   | 二三 |
| あとがき      | 二三 |



前登志夫自選歌集

非  
在



歌集『子午線の繭』抄

樹

昭和三十年～昭和三十二年

かなしみは明るさゆゑにきたりけり一本の樹の  
翳らひにけり

樹

ひと冬を鳴く鶉<sup>ひは</sup>ありきたましひは崖にこぼるる  
土くれの量<sup>かさ</sup>

置忘れ埃かむりし地球儀をまはしてをれば細  
き鶉の声

木の根にて飾られし崖とほりすぎ慾情のごと眩  
暈<sup>み</sup>はありき

あけがたの白くしみゆる杉の木の根かたにこぼ  
るいきものの齒は

樹に告ぐる飢ゑ透きとほる鶉の朝つぶさに懸か  
る白き日輪

悔ならむ、雪となりたるこのあした山越しの鳥  
をはこぶ叫びぞ

わが柩ひとりの唾に担がせて貧のかげ透く尾根  
越えにゆけ

海にきて夢違観音かなしけれとほきうなさかに  
帆柱は立ち

海にきて

永き不在生くるいのちは海原に五つばかりの帆  
をかくしおけ

古めきし別離はありき歩みゐるこのやみの圈わに  
海は眠れり

夜の歩みはてしなくたたむ暗闇くらやみのむささび型の  
てのひらに問ふ

岩に貝を投げつけて割り食たうぶると古き代の生活たつき  
言ひし少女子をとめこ

荒磯の瀬水に洗ふ貝の肉いつはりし舌痺るとど  
ろき

もの音は樹木の耳に蔵しまはれて月よみの谿をのぼ  
るさかなよ

月読行

部屋にひびく早湍はやせをさかなのぼる夜に鉛筆を削  
り突刺さる Vie

あなうらゆ翔びたつ雉の黄金きんのこゑ天夭えうえうとして  
樹々は走れる

雉村

大斜面の青飛ぶ辛夷雉村に教科書を読む少年の  
声

百段の田をつぎつぎにひたしゆく水の下降に涙  
湧きくる

家もなし野もなしゆき霏霏とふるいま鳴る楽は  
黒き地の時間  
霏霏

みゆるなし、野の真央にぞくらみたり幾めぐり  
する櫓こそきこゆ

雪原にわれを縛れる紐ありきその黒き紐を手繰  
る貌あらむ

地の終りかくもはげしと吹雪くなか喉のぼし飛  
ぶ黒き鳥なれ

風やみて死者の境に近づきぬわが足あとのすで  
にあらずも

つひにしてわれのみ黒く歩みをりこの白き野に  
動く紙魚なれ

地下鉄の赤き電車は露出して東京の眠りしたし  
かりけり

都市の神話

ものみなは性器のごとく浄められ都市の神話の  
生まると言へ

めぐりあへず林檎三つを求むれば果実の目分量  
られたりき

時計のごと果実の値定めたりわが愛の重さ量る  
針あるか

向う岸に菜を洗ひるし人去りて妊婦と気づく百  
年の後  
予言

小春日の道端で靴を繕へる靴屋はわれに結婚す  
なと言ふ

つつましく橋渡りこし素直さも斜に踵の減りつ  
くしたる

脱ぎざまの冷淡なわれの靴ひとつ正面に据ゑて  
裏返されぬ

物象<sup>もの</sup>なべて凍<sup>い</sup>てて音なき黄昏の限りなく遠しと  
ほしその城  
樹・樹・樹

冬萌ゆる草凍えしを踏みゆけば夕茜する病める  
か空は

死にゆきしわが動物の仕草など顛<sup>あは</sup>れて来つ凍え  
る庭に

手の孤独その手を落つる滝なれば叫びのごとく  
冬は会ふなり

乏しさを分たむかなや椅子をたち垂れしその手  
のひそかなる滝

渦巻いて疾風はやちののぼる坂下り誇るべきものはな  
し革命もせざりき

形象いめいじの毛並をたてて叛くとも清しき冬ぞ世界の  
真晝

雪ふれば祈れるごとく道をゆく雪つもる樹のか  
たはらを過ぎ

死者も樹も垂直に生ふる場所を過ぎこぼしきた  
れるは木の実か罪か

刺すごとく空を指さす杉の樹のたちまちにしろ  
し祈るべくして

けものみちひそかに折れる山の上<sup>へ</sup>にそこよりゆ  
けぬ場所を知りたり

見者

世を拗ねし者ならなくにまなかひにけものみち  
消ゆここに嘆きつ

どの神も信じてをらずさりながらけものみちゆ  
きし ゆきしものあり

かうかうと獣と人の歩みたるひそけき辻に石は  
彫られぬ